

父親の心理的健康の促進における育児と財政的貢献の重要性

Holly S. Schindler (2010) "The Importance of Parenting and Financial Contributions in Promoting Fathers' Psychological Health" *Journal of Marriage and Family* 72: 318-332.

相模女子大学非常勤講師 岩崎 香織

日本の父親の育児時間は、他国と比べて短いことが指摘されている。2005年実施の『家庭教育についての国際比較調査』（文部科学省）によれば、12歳以下の子どもをもつ父親の「平日一日あたりに子どもと過ごす時間」は、日本3.3時間であり、タイ（5.9時間）やアメリカ（4.6時間）、スウェーデン（4.6時間）、フランス（3.8時間）より少なく、韓国（2.8時間）より僅かに長いことが示された。日本の場合、前回調査（1994年）の値と大差なく、この10年で父親の育児参加の実態に変化はなかったという。しかし、「子どもと接する時間が短い」という父親の悩みは、前回調査（1994年27.6%）よりも増加した（2005年41.3%）。以上の報告から、日本の男性に「子どもと接する父親像」が、理想の一つとして浸透しつつあるとも考えられる。

本論文が対象とするアメリカにおいては、伝統的に父親の役割として稼ぎ手であることが重視されてきたが、この数十年で母親の就業率は増加し、社会的に父母の共同養育や父の育児参加が重視されるようになり、父親役割の内実が変化しつつあるという。家族システムが複雑に変化・発展を遂げる今日、育児は、妻子のためだけでなく、父親自身のメリットにもなるのではないかと、本論文は、心理的健康という観点から父親役割遂行の効果を検証したものである。

具体的には、家族システム理論、性別役割、生殖性、多重役割の主に四点から、父親役割（育児と財政的貢献）の遂行とウェルビーイング（自尊感情、自己効力感、ディストレスの三尺度から測定）の関連について検討している。

家族システム理論によれば、家族の一部の変化は全体の変化を引き起こし、相互関連の影響を与えると想定される。育児を通じて形成された親密な父子関係は、子どもの発達だけでなく父親にも影響を与えると考えられる。性別役割の理論では、個々に内面化され

た性別役割期待に背いた場合、自尊感情の低下もしくはネガティブな精神的影響をもたらすと想定される。父親の育児に対する価値意識は、近年、変化しており、稼ぎ手だけでなく、育児の担い手としての父親役割が、内面化されている可能性が考えられる。生殖性は、E.エリクソン（1974）により提唱された概念であり、次世代の価値創造に積極的にコミットすることを意味し、成人期の発達課題とされる。父の仕事には、子どもの世話といった子どもの欲求に応じる内容だけでなく、ゲームや宿題をみるといった“喜び”や子どもとの“意義深いつながり”が含まれる点に特徴があるという（Dollahite *et al.* 1997）。ゆえに育児は、父親自身の喜びともなり、心理的な恩恵をもたらすと考えられる。多重役割は、社会的なサポートを手に入れ、自己の複雑性を増し、パートナーとの関係を築くという大きな成功体験の機会を提供するため、全体的な健康に結び付くと仮定される。

以上の理論から、父親の育児は、財政的貢献と同様に父親の心理的健康を促進するという仮説が導かれた。しかし、先行研究においては、父親の育児と心理的健康の因果関係を真逆にとらえたものもある。本論文は、パネルデータを用いて父親の育児と心理的健康の因果関係の検証を試みた点に特徴がある。

使用データは、The Panel Study of Income Dynamics (PSID) の The Child Development Supplement (CDS) の Wave1 (1997年)・Wave2 (2002年) 調査である。PSIDは、1968年に始まった追跡調査であり、全米から代表サンプル（世帯）を抽出している（オリジナルコーホート4800世帯）。CDSは、PSID対象者のうち1997年に0～12歳の子どもを持つ両親（2394世帯）を対象にした調査（Wave1）であり、5年後に追跡調査（Wave2）を実施している。本論文では、CDSのWave1・2の双方に回答し、両親が子どもと同居している生物学的父親771名を対象とする（子どもが複数いる場合には、

特定の1名についての回答を使用)。分析は、固定効果モデルを基本とする Semidifference models が使用された。

分析の結果、父親にとって初期(Wave1 時点)の育児頻度の高さは、有意に自己効力感を高め、ディストレスを軽減する効果を持ち、育児頻度の増加(Wave1 と Wave2 の差)は、ディストレスを有意に軽減することが明らかとなった。財政的貢献は、初期(Wave1 時点)の自尊感情を有意に高め、ディストレスを減らし、財政的貢献の増大(Wave1 と Wave2 の差)は、自尊感情と自己効力感を有意に高めることが明らかとなった。したがって、育児と財政的貢献は、共に父親のウェルビーイングを促進することが実証された。特にウェルビーイングのうち、育児はディストレスを軽減し、財政的貢献は自尊感情を高める効果が大きいと考えられる。

次に、育児頻度と財政的貢献の変化量(Wave1 と Wave2 の差)について、父親のウェルビーイングの規定力を分析した結果、育児頻度の変化量は、父親のウェルビーイングとの関連が有意でないことが示された。財政的貢献の変化量は、初期の自尊感情と自尊感情の変化量の規定力が有意であった。すなわち、父親のウェルビーイングが高まることにより、育児参加が促されるという関連は、みられなかった。

本論文の結果から、アメリカの父親にとって、育児が財政的貢献と同様に重要な父親の役割として認知さ

れている現状が示された。日本の父親の役割は、いまだに稼ぐことが中心であり、育児についても「責任が軽く、遊びの要素が強い」(大日向・新道 1994)等と批判される。しかし、「喜び」や“意義深いつながり”を含む育児が、父親のウェルビーイングを促進するならば、子どもとの共有時間を充実させ、楽しむことから、父親の育児を促すことが有効と考えられる。今後、日本においても「妻子のための育児」の強要でなく、「自分の人生を充実させる育児」へと男性や社会の意識が転換していくことが望まれる。

参考文献

- Dollahite *et al.* (1997) "Fatherwork: A conceptual ethic of fathering as generative work," In A. Hawkins & D. Dollahite (Eds.), *Generative fathering*, Thousand Oaks, CA: Sage.
- Erikson, E. (1974) *Dimensions of a new identity*, New York: Norton.
- 牧野カツコ・渡辺秀樹・船橋恵子・中野洋恵編著(2010)『国際比較にみる世界の家族と子育て』ミネルヴァ書房。
- 大日向雅美・新道幸恵(1994)「父親の育児参加」高橋種昭・高野陽・小宮山要・大日向雅美・新道幸恵・窪龍子『父性の発達』家政教育社。

いわさき・かおり 相模女子大学非常勤講師。最近の主な論文に「高等学校家庭科履修の効果——進学校男子のケア行動を中心に」『PROCEEDINGS』04(お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム, 2009年)。家政学, 家庭科教育学専攻。